

丹下和彦氏講演会

『精神史としてのギリシア悲劇：前5世紀アテナイの知的状況』報告

『古代ギリシア悲劇から学ぶ 現代社会を生き抜くための対話力』

田島充士

1. はじめに

東京外国語大学総合文化研究所主催事業及び、報告者が研究代表を務める科学研究費補助金・基盤研究(C)『多文化社会を創造的に生き抜くためのリーダーシップ養成：「異文化跳躍力」の提案』の共催事業として、古代ギリシア文学研究を専門とする丹下和彦氏を本学に招き、オンライン形式による講演会を2021年1月18日(月)17:50～19:30に実施した。来場者は東外大生がおおよそ60名、外部からの参加者がおおよそ40名だった。

上記の科研では、現代のコミュニケーションを分析するフレームワークとしては古典的な位置づけにあるロシアの文芸学者・M.M. バフチンの対話理論を概念的支柱としている。バフチンの議論は、古代ギリシア・アテナイで花開いたソクラテスの哲学および、同時代の悲劇・喜劇に関する知見からの影響を受けている(田島, 2020; Tajima, 2021)。丹下には本科研のテーマにあわせ、古代アテナイにおける知的文脈について解題するよう依頼した。

本レポートでは本講演の概要について、丹下が作成したレジュメおよび、講演実施時に報告者が書いたメモをもとに紹介する。その上で、古代ギリシア悲劇から学び得る、現代社会に生きる我々が生産的に生きるための力について考察してみたい。

2. アISKYロス『オレステイア』にみる新しい正義としての法

古代ギリシアでは、民族を特徴づけるイデオロギー・価値観として、「法(ノモス)」「知(ソ피아)」「自由(エレウテリア)」「徳・勇気(アレテ)」が存在した。丹下はこれらのうちの法に焦点を当て、当時、盛んに上演されていたギリシア悲劇の作品を対象として、高度に発展した市民社会における人々の精神状況について分析を行った。

この問題について丹下が最初に取り上げたのが、現代に多くの脚本が残る三代悲劇詩人(アISKYロス・ソポクレス・エウリピデス)の中で、年長のアISKYロスが描いた『オレステイア』(紀元前458年上演)である。



全ギリシア軍の総大将としてトロイアに攻め込み、勝利を得たミケナイ王・アガ멤ノンは帰国後、情夫を得た妻のクリュタイメストラによって暗殺されてしまう。その後、父の仇を討つようアポロンによる神託を受けた息子のオレステスによってクリュタイメストラは殺害されるが、オレステスは実母殺しの非道を責める復讐の女神によって深く思い悩まされることになる。オレステスはアポロンの指示によってアテナイの法廷に出向き、そこでアテナ女神を裁判長とする評決に身を委ねる。その結果、アテナイ市民の陪審員11名による評決は有罪6・無罪5となった。しかし裁判長のアテナが無罪に1票を投じて同数となり、同数は無罪との取り決めによってオレステスは無罪放免となった。

この作品について丹下は、法によって達成される新しい正義のあり方を問うものであると指摘した。古い氏族社会では一般的な通念とされた、力のある者による力のない者への支配として実現される正義から、共同体を構成する人々による言論＝法による正義への移行を示すものといえる。換言すれば、共同体を統べる中心原理が、物理的な力の行使から知のフィールドへと移行し始めたということである。丹下は本作品を、アルカイックな正義では止めることのできない復讐という暴力の連鎖を、人々の協働的な知性によって断ち切るという、新しい市民社会における価値観の到来を示すものと評した。

3. エウリピデス『オレステース』にみる法の正義の限界と個の意識

この法の正義の確立は、紀元前5世紀のアテナイ市民にとって、共同体を運営していくうえで非常に重要な手段となった。しかし時代が進むと、内乱や革命などでアテナイ社会の秩序にほころびが見られるようになってきた。共同体の構成員に平等に適用されるべき法は、秩序が不安定な状況においては個々人の思惑が反映されやすくなり、その適用を巡って深刻な争いが生じることもあった。丹下は、人々による混乱した法の運用による状況を、ソポクレスの『アンティゴネ』（紀元前442年上演）およびエウリピデスの『オレステース』（紀元前408年上演）を事例として解題した。本節では『オレステース』に関する丹下の議論を報告する。

アイスキュロスの『オレスティア』と同じ題材を扱い、そのおよそ50年後に上演された本作品は、アイスキュロスが誇り高く掲げた法による正義の限界を指摘するものであった。

本作品では、アイスキュロスの作品において主人公らに具体的な神託を下していた神が、終幕を除いて、登場人物としてはほぼ登場しない。オレステスは冒頭から、実母を殺害したという良心に一人で苦しむ。娘を殺された祖父のテュンダレオスは「父の仇討ち」というオレステスの訴えに耳を貸さず、アガ멤ノンを殺害したクリュタイメストラの不法は法廷で訴えるべきだったと断罪する一方、法を曲げてでもオレステスを死刑にして仇を討つという矛盾した宣言をぶつ。アガ멤ノンに恩義のある叔父のメネラオスは、オレステスの主張を口先では支持するものの、権力者であるテュンダレオスの意向を恐れ、実際に救済に動こうとはしない。その結果、民会で有罪となったオレステスは、生き延びるために姉や友人と共に武装蜂起し、メネラオスの妻と娘を人質として館に火を放って逃亡を図

ろうとする。オレステスを追いかけるメネラオスと一触即発となったとき、突然、アポロン神が登場して事態を丸く収める¹。民会での決議（死刑）はこのアポロン神のとりなしで破棄され、オレステスは死なずにすむことになる。

丹下は本作品について、戦争や内乱で疲弊していた当時のアテナイ社会における価値観の混乱を描き出すものであると指摘した。特に本作品で問題となるのは、権力者であるテュンダレオスが恣意的に法の運用を行い、オレステスへの死刑判決を民会で勝ち取ったこと、そしてその決議を、オレステスが実力行使により無効化しようとしたことである。これは曲がりなりにも民会で決定した市民の意向に対し公然と反対するという、法による市民社会の運営をないがしろにする行為である。突然の神の介入によって劇は終わるが、作者が伝えたかったのは、オレステスの法を無視した武力蜂起とその後の成り行きであったと丹下は論じた。その意味でオレステスは、紀元前5世紀の混乱期に育った、道義を忘れた武闘派の一人として考えることができるのだという。

ギリシア社会において重視された法の概念すら、実力者の恣意的な意向によってねじ曲げられる状況は、力ある者による正義というアルカイックな価値観に逆戻りしたかのようである。法とは、どれだけ精緻なものであっても、それそのもののみで正義を成り立たせるものではなく、法を運用する人間の都合によって改変され得る、危うい存在でもある。それは未曾有のコロナ禍にあえぎ、法的秩序の混乱を来しつつある現代の国際社会にも通じる、普遍的な宿命でもあろうと丹下は結論づけた。

4. 『オレステース』にみる自意識の自律性と知の自由の成立

一方、この『オレステース』は西洋文学史において、神や法などの社会的権威に頼ることのできない混乱状況の中で、物事の善悪を解釈し独自の世界観を創出しようとする個人の自立した自意識を描き出した最初期の作品であるとも評価されている (Snell, 1964; 丹下, 2008)。また Snell は本作品について、「明白な諸価値が疑わしくなり、人間は自分の行動を当然のこととして果たしているさ中で行き止まってしまい、正義とは何か、不正とは何か、ということをも自分で考えねばならない。・・・それは、自由と自発的行動の意識である」 (Snell, 1953, p.123, 邦訳 p.236) と論じている。

この「自由」を認識する自意識は、外部の権威的イデオロギーに依存せず、自らの視点から物事を解釈することによって達成されるものといえるが、それは以下の抜粋のオレステスのように、複数の矛盾するイデオロギー（本事例では父親の仇討ちを命じるアポロンの神託と母殺しへの自責の念を象徴する復讐の女神）の間で右往左往する「知（シュネシス）」に現れるともいえる（丹下, 2008）。

¹ このように、ドラマとは直接的な関わりなく登場して錯綜したストーリーをまとめる神は「デウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）」とも呼ばれ、エウリピデスはこれを多用した。

メネラーオス：・・・お前を滅ぼす病というのは何なのだ。
オレステース：恐ろしいことをやってのけたのを知っている、その知（シュネシス）です。
・・・
メネラーオス：どんな幻のために、そうして狂わされているのだ。
オレステース：夜に似た三人の娘の姿を見たようでした。
メネラーオス：それなら知っているが、名前は口にしたくないものだ。
・・・
オレステース：でも僕たちには、この災いの遣り場があります。・・・アポローンにです、
母親殺しを命ぜられた。
メネラーオス：なにしろ、善や正義をよく弁えておられない神だから。・・・ロクシアース（ア
ポローンのこと）はお前の不幸を防いでくれないのか。
オレステース：ぐずぐずしておられる。神様というのはそんなものですが。
(エウリーピデース, 1990, pp.273-275)

古くからギリシアの人々は、葛藤状況に置かれると具体的な指示を出す神が降臨し、その指示に従うという精神を持っていたことが、ホメロスの叙事詩などの古い文学作品において記録されてきた。この古典的な精神は「二分心」とも呼ばれる (Jaynes, 2000)。アイスキュロスが『オレスティア』で描いた、アポロン神やアテナ女神など多弁な神々とオレステースとのやりとりは、オレステース自身の二分心の残滓を示すものといえよう。しかし『オレステース』でエウリピデースが描き出した、出現を期待する神々がほぼ沈黙し、自らの生きる道を悶々と独りで模索せざるをえない自意識におけるオレステースの知の自由は、神の権威的指示に従順であった古典的な二分心的精神と比較すれば、新奇なものであっただろう。

5. エウリピデースが描き出した知とソクラテスの対話

古代アテナイにおける著名な哲学者・ソクラテースは、同時代人であるエウリピデースと互いに誼を通じていた可能性も指摘されている (Lefkowitz, 2016)。対話相手の抱いた思想を様々な状況に適用させてその展開可能性をテストするという、ソクラテースのいわゆる「産婆術」は、主人公らを困難な状況に置いて、彼らの思想を展開させるという悲劇詩人の技法に類似したものとの指摘もなされている (Snell, 1953)。

丹下は講演において、ソクラテースの対話を描いたプラトンの初期作品として知られる『ゴルギアス』に記録された、優れた者・強い力を保有する者こそが正義の担い手であり、そうではない弱者は彼らに従うしかないとする若者・カリクレスの以下の主張を紹介した。これは法の概念が根付く前のアテナイで共有され、またエウリピデースの時代にも再燃したアルカイックな正義観を示すものといえる。

ヘラクレスは、金を払って買ったのでもなければ、贈り物として与えられたものでもないのに、ゲリュオネスのところから牛を駆り出して連れ去ってしまったというのである。それは、牛であろうと、その他の財産であろうと、およそ劣者、弱者のものは、すべて優者、強者の所有に帰するということ、これこそが自然本来における正義だと考えたからだというのである。

(プラトン, 1974, pp.116-117)

しかしソクラテスはまるで悲劇の主人公のように、カリクレスの主張を、様々な具体事例に適用させることで試練にかけている。その結果、このイデオロギーは一貫性を失い、カリクレスは複数の矛盾する状況のなかで葛藤する知を展開せざるを得なくなる場面が見られるようになる。ソクラテスの哲学とはこのように、様々な具体的状況においてもなお適用可能性の高い意味を持ち、人々の行動指針となるイデオロギーを紡ぎ上げる対話として立ち現れるものといえる。以下の対話事例の最後で吐露されるカリクレスの気色ばんだ反論は、意図せずして悲劇的な試練にかけられた彼の戸惑いを示すものといえよう。

ソクラテス：君がより優れた人と言っているのは、より思慮のある人のことではないのかね。どうだね、これは認めるのかね。認めないのかね。

カリクレス：それは認める。

ソクラテス：ところで、より優れた人は、より多く持つべきであると、こう君は言っているのではないか。

カリクレス：うん。だが、それは、食べ物のことでもなければ、飲み物のことでもないのだ。

ソクラテス：ああ、わかったよ。でなければ、たぶん、着物のことだろうね……

(中略)

カリクレス：……あなたはいつだって、靴屋だとか、洗い張り屋だとか、肉屋だとか、そして医者だとかのことばかり話していて、いっこうにやめようとししないのだ。まるでぼくたちの議論は、その人たちのことを問題にしてでもいるかのようにね。

(プラトン, 1974, pp.133-134)

6. まとめ

丹下の講演を聴講して改めて考えたのは、現代に生きる我々大学教員が、学者として担うべき役割である。Cornford (1932) はソクラテスの対話を通じた話者の変化を、両親の権威によって秩序づけられた世界観を批判し、独自の視点を持って自らのイデオロギーを創出しようとする青年の自意識の発達と同一視する。このことはまた、古く固定的・権威的なイデオロギーに頼っては生き延びることができなかつたオレステスが示した、紀元前5世紀当時のアテナイの葛藤的な時代背景の下に生まれた知の有り様をも示すものだろう。そして学問とは本来、このような昏迷の時代を生き抜くための、しなやかな自意識を人々に養成する上で必要とされる実践なのだろう。

現代の高度に国際化された社会において人々は、異質な歴史的・文化的背景をもち、葛藤的なイデオロギーを主張する他者と必然的に出会わざるを得ない。この「悲劇的」な状況において、他者の主張を拒絶せず、かといって相手の言に盲従もせずに生き延びるためには、相手と対等な立場を相互に尊重した「対話」(バフチン, 1996) を続ける能力が必要になるのだろう。この状況に生きる若者達を支援する立場にある我々大学教員には、過去の権威が提示するイデオロギー、対話相手が主張する具体的な反論、自分自身の考えなど複数の視点で揺れ動きながら共に生きる道を創出できる、強靱かつしなやかな知の展開を、学生らが在学中に豊かに経験できる悲劇的≒学問的機会を提供することが期待されるのだろう。

安易な解決法に飛びつくことが許されず、自分自身の視点から他者との共生のあり方を問い続けることが要請された古代アテナイに匹敵する混乱状況を生きる我々は、それだけいっそう、特定のイデオロギーに束縛されない知的な自由を謳歌できる可能性も持つといえる。本講義に参加した多くの聴講者が「古代ギリシアの知的財産から学び取れることは多い」とコメントで指摘したように、古代アテナイから我々が引き継ぐ悲劇・哲学は、現代社会を生き抜くためのアイディアを掴む、重要なリソースであることを改めて認識した講演会だった。

<付記>

本論文は、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費助成事業（基盤研究（C）・課題番号：18K03060・平成30年採択）の助成を受けて執筆した。

<引用文献>

- バフチン, M. M. 伊東一郎 (訳) (1996). 小説の言葉 平凡社
Cornford, F. M. (1932). *Before and after Socrates*. Cambridge University Press. (コーンフォード, F.M. 山田道夫 (訳) (1995). ソクラテス以前以後 岩波書店)
エウリーピデース 中務哲郎 (訳) (1990). オレステース 松平千秋・久保正彰・岡道男 (編) ギリシア悲劇全集 8巻 (pp.247-355) 岩波書店
Jaynes, J. (2000). *The origin of consciousness in the breakdown of the bicameral mind*. Houghton Mifflin Company. (ジェインズ, J. 柴田裕之 (訳) (2005). 神々の沈黙：意識の誕生と文明の興亡 紀伊國屋書店)
Lefkowitz, M. R. (2016). *Euripides and the gods*. Oxford University Press.
プラトン 加来彰俊 (訳) (1974). ゴルギアス：弁論術について 田中美知太郎・藤沢令夫 (編) プラトン全集 9 (pp.1-243) 岩波書店
Snell, B. (1953). *The discovery of the mind: The Greek origins of European thought* (T.G. Rosenmeyer Trans.). Harvard University Press. (スネル, B. 新井靖一 (訳) (1974). 精神の発見：ギリシア人におけるヨーロッパ的思考の発生に関する研究 創文社)

Snell, B. (1964). *Scenes from Greek drama*. University of California Press.

田島充士 (2020). バフチン理論における詩と小説：ソクラテスのダイアローグ論およびカーニバルにおける笑い論を中心的な視座として 総合文化研究, 23, 102-124.

Tajima, A. (2021). A sustainable consciousness promoting dialogue with alien others: Bakhtin's views on laughter and Euripides' tragi-comedy. *International Review of Theoretical Psychology*, 1, 225-242.

丹下和彦 (2008). ギリシア悲劇：人間の深奥を見る 中央公論新社

『精神史としてのギリシア悲劇：前5世紀アテナイの知的状況』

総合文化研究所主催・科学研究費補助金（基盤C）共催講演会（オンライン開催）

講演者：丹下和彦（大阪市立大学名誉教授・関西外国語大学名誉教授）

講演企画者・報告者：田島充士（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

主催 東京外国語大学総合文化研究所

共催 日本学術振興会・科学研究費補助金 (基盤C)

『多文化社会を創造的に生き抜くためのリーダーシップ養成』

精神史としてのギリシア悲劇： 前5世紀アテナイの知的状況

講演者：丹下和彦（大阪市立大学名誉教授・関西外国語大学名誉教授）

企画者・コメンテーター：田島充士（東京外国語大学准教授）

講演内容

古代ギリシアの前5世紀は啓蒙の世紀といわれる。法（ノモス）、知（ソ피아）、自由（エレウテリア）、徳・勇気（アレテ）が時代を象徴し代表する価値観と見なされた。このことは歴史家ヘロドトスとその著『歴史』でつとに指摘しているところである。ギリシア悲劇とその上演はこの価値観を考究し、表示し、確認する重要な精神活動であると言ってよい。劇場ばかりではない。アゴラ（広場）ではソクラテスが誰彼なく人をつかまえて愛、知、善、美などについて対話を試みた。本講義では法と正義の問題を取り上げ、その諸相を悲劇作品の中に見てみたい。まずカリクレスの強者の正義論（プラトン『ゴルギアス』）を口切に、アイスキュロス『オレスティア』、ソポクレス『アンティゴネ』、エウリピデス『オレステス』などの作品中に法と正義の問題がどう扱われているか、探ってみよう。

講演者紹介

たんげ・かずひこ

1942年、岡山県生まれ。京都大学博士（文学）。大阪市立大学名誉教授、関西外国語大学名誉教授。

古代ギリシア文学研究者。古代ギリシア悲劇を中心に、多くの論文・著書・訳書を手がける。

主著は『ギリシア悲劇：人間の深奥を見る』中央公論新社2008、『ギリシア悲劇ノート』白水社2009ほか多数。

学術活動のほか、大阪を代表する演劇研究集団『清流劇場』において、舞台の監修も務める。

日時：2021年1月18日（月）17:50-19:30（開場17:10）

開催形態：ZOOMを使用したオンライン形式講演

参加費用：無料

参加申込み方法：参加希望者は、以下のメールアドレスにご連絡をいただくか、QRコードにアクセスして下さい。参加申込み用ページにご案内いたします。

参加申込み期限：2021年1月15日（金）17:00



参加申込み先：tufs.lecture.on.greek.tragedy2021@tufs.ac.jp
ないし左のQRコード。

※ZOOMの操作方法など使用機材のテクニカルサポートはできかねますので、ご了承ください。